

旅・いろいろ地球人

「マレーシア ふしぎばなし」 信田敏宏（国立民族学博物館教授）

(1) おばけ 2019 年 12 月 7 日刊行

マレーシアの熱帯雨林に暮らす、先住民オラン・アスリの村で、不思議な出来事に遭遇した。

ある夜、私はうすい布を体にかけて眠っていた。暑さにバテ気味だった私はぐっすり眠っていたのだが、突然、「金縛り」に襲われた。意識ははっきりしているが体は動かず、目を開けることもできなかった。すると、足元からじわじわと誰かが覆いかぶさってくるような感覚。恐怖に怯えながら、しかし動くことができずじっと耐えていると、その感覚はついには胸のあたりまで上がってきた。首を締められるのではという恐怖から、力を込めて目を開き、両腕を振り回して得体のしれない何かを追いつめた。その瞬間、白い布をまとった何かが、さあーと部屋の窓に飛んで行った。長い黒髪の女性だった。

翌朝、村人にこの話をしたところ、その話が広まって、ひっきりなしに次から次へと村人たちが私の家に話を聞きにくるようになった。どの村人も笑顔はなく、神妙な面持ちで話を聞いていた。そしてみな、「それはきっと、かつて村の学校で首をつって亡くなったマレー人の女性教師だろう」と言う。

幽霊は日本からきた私に興味があったのだろうか。それとも出て行けと言いにきたのだろうか。いずれにしても、この件で私は村人と親しくなることができたので、女性の幽霊には感謝している。



気さくな村人が多く、たびたび私の家に来ておしゃべりを楽しんでいた＝マレーシアの先住民オラン・アスリの村で 1998 年、筆者撮影

マレーシアの先住民オラン・アスリは、森の中にプタイという豆を採りに行く。プタイの木は高さ 30 メートルにもなる大木で、さやの長さは 40 センチくらい。中には十数個の豆が入っている。

ある日、村人のプタイ採りに同行した。バイクで 1 時間、丘を超え、谷を渡り、最後はバイクを降りて急斜面の道無き道を登って行ったところにその大木はあった。突然、「キーキー」という鳴き声が聞こえ、私がきょろきょろしていると、「猿だ」と近くの男性が教えてくれた。おもしろい鳴き声だったので、「キーキー」と、私もまねをしてみた。すると、男性たちが一斉に困惑したような表情になり、「そんなことしたらダメだよ。雷雨になるよ」と言いだした。

動物をからかうと嵐になり、雷雨がやって来るのだそうだ。まずいことをしてしまったと思ったが、後の祭りだった。ひとりの男性が耳に葉っぱをはさんで、何やら呪文を唱え始めた。森の精霊をなだめていたのかもしれない。

プタイの収穫が終わり、村までまたバイクを走らせていた時だった。空がにわかに暗くなり、どしゃぶりの大雨が降ってきた。頭からつま先までびしょ濡れになって、ようやく村に帰り着くと、男性たちから、「猿まねをしたせいだ」と言われた。翌日私は熱を出して寝込んでしまった。やはり森の精霊を怒らせてしまったようだ。



精霊のいる森は危険な場所なので、してはいけないことが色々ある = 1997 年、アル
シャド・エカル氏撮影

山あいにあるオラン・アスリの村に出かけ、疲労困憊でクアラルンプールのホテルに戻ってきた時のこと。山道を歩きすぎて、足が痛くてどうしたものかと思っていると、偶然にもホテルの入り口にフットマッサージ店があり、これ幸いと入ってみた。

担当してくれたのは少し年配の女性だった。彼女のマッサージは気持ちがよく、おかげで足の痛みもすっかり取れた。「これぞゴッドハンズ」と、心の中で思ったものだ。

翌日、電車に乗って街へ向かった。クアラルンプール中央駅で降りる、その時だった。肩にさげていたカメラのキャップが電車のドアに引っかかり、キャップが線路に落ちてしまったのだ。覗き込むと落ちているのが見えるが、どうしようもない。オロオロしながら困っていると、通りかかった女性が駅員を呼んで、キャップをとるように頼んでくれた。駅員はすぐに線路に降りてキャップを取ってくれたので、女性にお礼を言おうと振り返ると、女性は片手をあげて行ってしまった。どこかで会ったような気がしたが、誰だっただろうか。

帰国の前日、もう一度フットマッサージをしてもらおうとホテルの入り口の店に行くと、運良く「ゴッドハンズ」の女性が現れた。「このあいだは大丈夫だった？」と笑顔で話しかけて来た女性の顔をみたとたん、「ああ、カメラのキャップの!」。嬉しい再々会であった。



多民族が行き交うクアラルンプール中央駅。電車は時間通りに来ないのが当たり前＝
2016 年、筆者撮影

森の中のオラン・アスリの村。私は空き家になって随分たつ古い家に住んでいたが、そこには先客がいた。コウモリである。

少し留守にして帰ってくると、暗い寝室の天井には、いつも 2、3 匹のコウモリが逆さまにぶら下がっていて、私は箒を振って追い出した。床にはコロコロしたコウモリの糞がたくさん落ちていたので、要注意だった。ヤモリも住んでいた。「ちちっ」と鳴くのである。村人と話していると、ちょうどいいタイミングで「ちちっ」と相槌をうつからおもしろい。

一番の思い出はねずみである。家の周りでねずみをよく見かけたので、ねずみ捕りを買ってきた。ねずみの通り道に粘着剤を塗るのである。

ある日、台所の隅から「ちゅーちゅー」というねずみの鳴き声が聞こえた。見ると、20 センチ弱のねずみだった。真っ黒の粘着剤がくっついて動けなくなっているねずみを見ると、殺すことはとてもできなかった。仕方なく、粘着剤で黒くなっているねずみをつかんで、ビニール袋に入れ、草地めがけて思いっきり遠くへ投げた。「元気でな、でもここには来るな」と、心の中で叫びながら。

それから数週間後、家の中にねずみが入って来た。追い払おうとねずみを見ると、黒い粘着剤がべちゃっと体についている。「戻って来てくれたんだ」。どんな相手でも再会はうれしいものである。



ねずみが出没した台所。きちんと片付けしていなかったことも原因だったかも！ =
1998 年、筆者撮影